

## 復活節第5主日礼拝説教「宝とされて生きる」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年5月3日

### 【旧約聖書日課】出エジプト記 19章1～6節

<sup>1</sup>イスラエルの人々は、エジプトの国を出て三月目のその日に、シナイの荒れ野に到着した。<sup>2</sup>彼らはレフィディムを出発して、シナイの荒れ野に着き、荒れ野に天幕を張った。イスラエルは、そこで、山に向かって宿営した。<sup>3</sup>モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。「ヤコブの家にこのように語り、イスラエルの人々に告げなさい。

<sup>4</sup>あなたたちは見た

わたしがエジプト人にしたこと  
また、あなたたちを鷲の翼に乗せて  
わたしののもとに連れて来たことを。

<sup>5</sup>今、もしわたしの声に聞き従い

わたしの契約を守るならば  
あなたたちはすべての民の間において  
わたしの宝となる。

世界はすべてわたしのものである。

<sup>6</sup>あなたたちは、わたしにとって

祭司の王国、聖なる国民となる。

これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

### 【使徒書日課】ペトロの手紙一 2章1～10節

<sup>1</sup>だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、<sup>2</sup>生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。<sup>3</sup>あなたがたは、主が恵み深い方だということを楽しみました。<sup>4</sup>この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。<sup>5</sup>あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。<sup>6</sup>聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、  
シオンに置く。

これを信じる者は、決して失望することはない。」

<sup>7</sup>従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、

「家を建てる者の捨てた石、  
これが隅の親石となった」

のであり、<sup>8</sup>また、

「つまずきの石、  
妨げの岩」

なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずきののですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。<sup>9</sup>しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。<sup>10</sup>

あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、

今は神の民であり、

憐れみを受けなかったが、

今は憐れみを受けている」

のです。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 15章1～11節

1「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。2わたしにつながっていないが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。3わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。4わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。5わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。6わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。7あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。8あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。9父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。10わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。11これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にもあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。

### 「わたしはまことのぶどうの木」【こども説教のために】

イースターの日からご復活の主イエスが現れてくださらなかったならば、弟子たちは、きっと散り散りになってしまっていたことでしょう。そして、いつの間にか、主イエスのことも忘れてしまっていたかもしれません。けれども、ご復活の主イエスが現れてくださったので、弟子たちは散り散りになることはありませんでした。いつまでも主イエスのことを心に留め、つながり続けることができたのです。

「わたしはまことのぶどうの木」とおっしゃった主イエスは、「あなたがたはその枝である」とおっしゃいました。枝であるわたしたちは、ぶどうの木である主イエスにつながっていないければ、実を結ぶことができません。もちろん、実を結ぶようにと、ぶどうの木の世話をしてくださるお方があります。豊かな実を結ぶことができるように、天の御父が農夫として世話をしてくださっているのです。

天の御父は、わたしたちが本当に良い実を結ぶことができるように、いつも心をかけ、世話をしてくださっているのです。わたしたちは、主イエスと同じように天の御父と一つになりきれいでないから、良い実を結ぶばかりとは限りません。わたしたちの中からはありとあらゆる芽が出てきて、好き勝手に枝を伸ばしてしまい、良い実を結ばせないことがあるのです。そのような枝がわたしたちの中から出てきたときには、農夫である天の御父が取り除かれるでしょう。手入れをしてくださるのです。大切なぶどうの木の枝が、良い実だけを結ぶようにと、天の御父はお望みくださっているのです。

## 今は神の民

今日も、わたしたちは、日曜日の教会の営みへと招き入れられてまいりました。ここで共々に礼拝にあずかるためです。招き集められた「神の民」として、ご復活の主イエスと共に、神の御前に進み出るためです。

もちろん、わたしたちが日曜日の教会に来るのには、それぞれに理由があるかもしれません。ただ習慣になっているから来る、という方もあるでしょう。誰かに会うために来る、という方もあるでしょう。ここで何かを得たいと思ってくる、という方もあるでしょう。

あるいは、必ずしも自発的に来ているとも限りません。子どもたちは親や家族に言われて、あるいは学校の紹介で、来ていることもあるでしょう。ときには、どなたかの付き添いで来られる、という方もあります。

平日の教会に、一人で訪ねて来られる方があります。玄関で迎えると、牧師に用事があるわけでもなく、ただ「礼拝堂で祈ってもよいですか」とおっしゃる方があります。神社や寺院ではなく、教会で祈りたいとお考えになる方がいるのです。「二階が礼拝堂ですから、ご自由にどうぞ」とご案内します。もっと入りやすく、分かりやすい会堂であれば、黙って礼拝堂で祈って行かれるのかもしれませんが。牧師も、そのような方が誰にも邪魔されずに祈りのときを過ごせるように、二度目からは声をかけることを控えるようにしています。本当は、もっと多くの人に、教会堂が「祈りの家」としてすべての人に開かれたところであると知っていただくべきかもしれません。皆さんも、そのようなところとして、この礼拝堂を「祈りの座」としてもっと活用してくださいましたらよいと思います。

一人静まって祈る習慣は、わたしたちにとっても大切なことです。一日の生活の中で、皆さんはどのように祈りの時間を設けていらっしゃるのでしょうか。朝夕に聖書を読み、祈りの時間を取られているという方もあるでしょう。食前の祈りだけだ、という方もあるかもしれません。もしかすると、平日はほとんど祈ることなく過ごし、ただ日曜日の教会で祈るだけ、という方もあるかもしれません。

それぞれの祈りの習慣があります。それはそれでよいのです。

けれども、わたしたちは、日曜日の教会に招き集められて共にささげる礼拝では、一つになって、一つの祈りをいたすのです。わたしたちそれぞれの祈りの寄せ集めではありません。ご復活の主イエスに導かれて招き集められた「神の民」として、一つの祈りをいたすのです。ご復活の主イエスと結ばれた「神の民」として、ご復活の主イエスが祈られた祈りに、わたしたちの祈りを重ね合わせて祈るのです。初めはぎこちなくても、少しずつ、主イエスの祈りと一つの祈りへと祈りを重ね合わせて祈ろうとしています。

## 「わたしの愛にとどまりなさい」

「わたしにつながっていなさい」と、主イエスはおっしゃいます。教会へと招かれて来たわたしたちは、主イエスとつながり、結ばれるようにと、導かれてきたのです。

そのしるしとして、教会は、「洗礼」を授けてきました。ご復活の主イエスが弟子たちにお命じになられたときから、教会は、すべての人が主イエスと結ばれた弟子になるようにと、「洗礼」を授けてきました。

「洗礼」は、何かの資格ではありません。「天国行きの切符」のように考える人たちもいますが、それは御父である神だけがご存じのことです。わたしたちの信仰が確かだから受けるのでもなく、わたしたちの神学が確かだから授けられるのでもありません。

「洗礼」は、主イエスご自身が洗礼者ヨハネから受けたものでした。その「洗礼」を、主イエスは、ご自身を通してわたしたちを御父と結びつける恵みのしるしとして、弟子たちにお命じくださいました。そこに聖霊がお働きくださるとき、「洗礼」は、確かにわたしたちを主イエスと結びつけ、御父の愛と結びつけ、聖霊の交わりに結びつけるしるしとして働き始めるのです。

「わたしにつながっていなさい」とおっしゃられた主イエスと、わたしたちは、ただ、「洗礼」のしるしによってつながらせていただくことが許されているのです。主イエスご自身が、わたしたちとつながろうとしてくださっているからです。わたしたちを愛してくださっているからです。神が愛してくださっていることをご存じの主イエスは、その愛を、弟子たちに、わたしたちにも注いでくださっているのです。「わたしの愛にとどまりなさい」と。

主イエスの愛にとどまり、御父である神の愛にとどまることを、妨げるものがあるとすれば、それは、わたしたち自身の中にある何かです。わたしたち自身がこだわり、しがみつき、離れられないでいる何かです。それは、自分にとって大切なことかもしれません。宝のようなものかもしれません。けれども、それは、わたしたちを支配し、窮屈なところに縛りつけているものかもしれません。

神は、わたしたち人間のことを、「わたしの宝」とお呼びくださり、「聖なる国民」とお呼びくださるのです。「祭司」とお呼びくださるのです。この世界が「神の民」の国、「神の国」になるために、お選びくださったのです。それは、わたしたち自身の自己実現のためではありません。神の愛の実現のためです。この世界は、自己実現を望む者たちによって壊れ続けています。それでも、神は、この世界の命をご自身の愛によって回復してくださるというのです。すべての者が愛のもとにとどまり、「互いに愛し合う」者たちの国の民として回復されるようにしてくださるというのです。